

平成11年 7月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

## 十 王 の 話

十王とは、冥界の住人で死後に我々の罪を裁くという十人の王のことです。その中でも一番有名な王が閻魔王えんまおうです。この信仰は中国の唐代末期ごろ成立し、鎌倉時代に日本に伝わったと云います。特に、冥界の救済者である地蔵菩薩の信仰と結びついて各地に広まったようです。今でも青梅市の寺院で夏のこの時期のお施餓鬼会や、お盆の時に十王の掛け軸を本堂に吊るすところがあります。またその図柄は、中央に椅子に腰掛けた王とその、眷属けんぞく、前にある机の上には亡者の罪業が書かれているという、閻魔帳。また、その前には獄卒に引かれた亡者が、罪にみあった罰に科されている地獄図になっています。針の山に登らされる者や、舌を抜かれる者などいろいろな責め苦に会う図が描かれ、特に閻魔王の図には大きな鏡が描かれ、亡者はその前に引かれて行きます。するとその鏡に、ビデオテープの様に自分が行った、善悪の所業の場面が映し出されます。これでは弁解の仕様もありません。浄玻璃じょうはりの鏡というそうです。十王図の中では、奈良の国立博物館所蔵の鎌倉時代に陸信忠が描いた、重要文化財のものが有名です。さて、市内住江町の延命寺では、7月に入ると十王図を本堂の室中（正面中央の間）の左右の上部に掛けます。五人の十王を一本に纏めてあり、延寶三年（1675）という古い軸に上記の様子が描かれています。そして地蔵菩薩の姿を描いた軸を正面に奉ります。また、千ヶ瀬の宗建寺では、各王ずつで十本と地蔵菩薩の立像を描いた一本の十一本の軸がお盆の間掛けられています。この図には三十一年の春に寛泉という人が描いた事が記されています。十王を仏教辞典で調べると、秦広王、初江王、宋帝王、五官王、閻魔王、変成王、太山王、平等王、都市王、五道転輪王となっていて、それぞれ初七日、二七日、三七日……から七七日までの七王と百か日、一周忌、三回忌の三王という具合に対応し、その各王の本地仏として不動明王、釈迦如来、文殊菩薩と続く十三仏の仏様たちが連なります。ただ十王図により少し異動がある様です。因みに閻魔王の本地仏は地蔵菩薩となります。このように現在、年会法要として行われている初七日や四十九日、百か日、一周忌、三回忌という数え方は十王からきています。

さてまた、十王は掛け軸だけでなく木像もあります。鎌倉にある円応寺の十王像が有名で像高180cmを超える閻魔様や、関東地方を代表する鎌倉彫刻と評価される、初江王像があります。さて、市内では成木の延命寺に像高10cmのかわいらしい彩色の木像や、慈眼院の観音堂に20cm弱の木像、また、畑中の閻魔堂には像高20cmから40cmほどの木像の十王像が奉られています。特に閻魔像の閻魔王は玉眼で正徳三年（1713）の年号が書かれた像で、市内の中では大きな像です。十王は死んでから裁きをするとのことですが、私達にこんな所へ来るのではないぞと、諭しているのかもしれない。

(文責 棚橋)